

# 追放令嬢(男)、ダン ジョンに潜る

桂馬。桂馬。桂馬。

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

女が優性、男が劣性。そんな世界の男爵家に生まれたヴィーレの容姿は男なのにも関わらず少女みたいで、政略結婚させようにも引き取り手がいない。家から見放され、果ては何とか潜り込んだ冒険者パーティーからも追放されたヴィーレは不死の少女と出会った。

# 目次

	1 話	道理、信用とは	1
	2 話	死に近い場所	12
22	3 話	不死の少女を殺す方法とは	



# 1話 道理、信用とは

「あのなあ、ルングルン。飯にどんだけ金使った!? 我慢つて単語、知ってるか!」  
オリンダ・オートロツダは唾を飛ばしながら目の前の少女に声を荒げた。

冒険者パーティー『龍の穂先』。

リーダーのオリンダを筆頭に、周辺の町ではそこそこ名が通ったBランクの冒険者パーティーとして活動している。

この場にはオリンダの他にも『龍の穂先』のメンバー五人がいる。全員が完全武装。そして誰もが少女のことを睨んでいる。

傍から見れば恫喝の場面。しかし少女の行動は他のメンバーからすれば目に余るものだった。

「何ですかオリンダ。私たち冒険者は身体が資本、食事は少しパーティー名でツケてしまいましたがこのパーティーの資金力なら問題ないでしょう」

「お前の少しは異常なんだよ! どんだけ飯食ったら金貨2枚分も使う!」  
「金貨2枚、良いじゃないですか。男爵家の年間予算の万分の一以下です」

「そんなのと比べんな!」

「まあまあ、熱くならないでください。井戸から水汲んで来ましょうか？」

「……ああそうかい。じゃあ礼は拳でどうだい？」

「拳……ですか。切り落として渡されても困ります。私、イカれた趣味は持っていないので」

「よし、コイツ殺す。アタシは決めた。依頼の失敗に託けて殺す」

「よしなよオリンダ！ 流石に殺しは良くないって！」

ボルテージが上がり始めたオリンダの腕を仲間の一人が抑える。

問題は至ってシンプルだった。

少女はお腹が減っていた。だが間の悪いことに金は無かった。なのでパーティーのツケにして高い飯をたらふく食った。それだけだった。

ついでにその時の少女の金銭感覚はバグっていた。出身が貴族というのもあって元は金遣いが荒い。

それを後から知ったパーティーメンバー、主にオリンダが『新入りの癖に何しやがってんだ』と激昂しているのがこの状況である。

「……はあ。パーティーの金で飲み食い、そりゃ結構さ。だが金の重みは命の重みより上だ」

「命より金銭が上ですか？ 命は一度失えば戻らぬもの、ですが金銭は幾らでも稼げま

す」

「お綺麗だね。アタシたち冒険者は命を担保にして金を稼ぐ。金のためなら死んでも構わないと考えてるから命を担保に出来てるんだ。担保より得るものの方が上に来るのは当然だろう」

むぐ、と唸ると少女は後退る。

少女にとって金とは気付けばあるものだった。何もしなくても、努力もしなくても、何処からか沸いてくる物に過ぎなかった。金の価値が高いのは分かるが死んでまで得ようとは思えない。貴族なら当然の価値観、冒険者としては有り得ない価値観だ。

「ったくなんでこんなのをパーティーに入れたんだか……確か、ソルネットー」

「あ、あいー！」

オリンダの声に固い声音で反応した。

少女を囲む五人の中の一人で、一歩前に出た。小柄な少女だ。長い茶色の前髪のせいで目が半分隠れてる。だがその瞳からは緊張の色が見え隠れしていた。

「お前が推薦したよな？ 見込みがありそうだった」

「あい！ 前途有望な若者ですリーダー！」

「若者は誰もが前途有望だソルネット。んでソルネット、お前はこいつに金貨2枚の価値はあると思うか」

「……あい?」

「お前が推薦したんだ。この馬鹿女の面倒を見ようつてならお前が金貨2枚を出すのが筋だろう。だからその価値はあるのか、と聞いているんだ」

少女はソルネットへと縋るような視線を送る。ソルネットは視線を気にして何度もチラチラと少女の方を確認すると、顎に手を当てる。

たつぷりと時間を置くと、ソルネットは答えを出した。

「無いです」

「え!？」

「だろ?」

当たり前だった。世間知らずのタダ飯食らいなんてこの世界で最も使えない人種である。少女がその自覚に乏しいのもソルネットのその容赦ない判断を助長させた。

「ということでルンルグールン、パーティーを抜ける」

「パーティーを……ですか?」

「ああ。アタシのパーティーは未熟を責めるような真似はしない。Bランクまで上がったのもソルネットみたいな有能な人材を育てた結果だ。その代わりに道理を重視する。冒険者は実力主義だがパーティーを組んで人間関係をやってこうつてなら実力より信用できるかどうかが焦点になるんだゼルンルグール。そして信用を生むには道理が必



要だ」

「道理、信用……。商人みたいですね」

「そうだねえ。あんなキチつとしたもんじゃないが、まあ他のパーティーに入ろうつていうなら今度は覚えとくといい。さ、ギルドカードを渡しな」

「……分かりました」

戸惑うように少女は目を伏せて、ゆっくりと懐からギルドカードを取り出した。

冒険者としての個人情報載っているのがギルドカードである。

オリンダは受け取ると、少女のギルドカードに掌を翳した。するとギルドカードに書かれてあるギルド所属欄、『龍の穂先』という文字。それが糸が解けるようにスルスルと消失していく。2秒もしない内に所属欄は空欄と化した。

少女はそれを呆然自失と、ただ見ていた。

オリンダは面倒くさそうに短い自分の赤髪を搔くと少女にギルドカードを返した。

「これでお前とアタシは個々の冒険者でしかない」

「そう……ですな」

「安心しな。飯のことなら、駆け出しに金貨2枚を請求するような真似はしない。ケジメならこれで付けた。じゃあ壮健でやってけよ、こんなナリじゃ厳しいかもしれんがな」

オリンダの言葉に他の5人も引いて行く。ソルネットだけは後ろ髪を引かれたように俯いた少女に視線を送る。でもそれだけだ。ソルネットも少女のことをパーティーに推薦した手前、これ以上庇い建てるような真似は出来なかった。

少女は手にしたギルドカードに目を落として、溜息を零した。

『龍の穂先』を抜けた少女は凹みに凹むと、町の郊外にある小高い崖で足踏みしていた。

「どうせ私……僕はこの世界じゃ、生きてけないんだからさ……」

この場に他の人間がいれば自殺志願者に見えただろう。そしてその評価は概ね正しい。

少女——いや少年はこの世界に絶望していた。

女尊男卑。この世界を形作る基本的なシステム。

女の方が頭が回る。女の方が力が強い。女の方が感性が豊か。そして魔法が唯一使

えるのも女。

そう言った常識が埃のように堆積し、女の方が生物的に優秀であると誰もが結論付けた。

貴族の世界でも同じだ。男爵家長男として生まれたヴィーレ・ルングルーグンは両親から疎まれていた。男は結婚して家と家をつなぐのが仕事で、要するに政治の道具だ。それなのにルングルーグン家としては困ったことにヴィーレの容姿は女性的だった。男なのに柔和な顔立ちで、色も薄い。14歳なのに産毛すら生えていない。加えて小柄だ。これを異性として見られる女は多くない。

利用価値が低いと見るとルングルーグン家はヴィーレを放逐した。『女性化粧を見つけて女になったらまた戻ってこい。折角女としては良い容姿なんだからそれを生かせ、ヴィーレ』と。ヴィーレはすぐに両親が適当な理由を付けて追い出したいだけと理解出来た。ヴィーレは女性化粧なんて聞いたことが無いし、未知のドロップアイテムが溢れるダンジョンでも確認されていない代物だ。言うなれば幻のアイテム。

それでも愚直に両親の言うことを守ろうと冒険者になった。だが冒険者の世界は女社会で、しかも貴族の常識が通じない。生来の容姿を生かして必死で女のフリをしてそこに混じって、何とか優秀な冒険者パーティーに加わったのに2日持たずこの有様。

情けないというか、やりきれないと言うか。

心中で複雑な感情が折り合つて絡まった。

織り成す感情は全部後ろ向きなもので、だからこんな殺風景な自己処刑場にまで足が動いた。

眼前に広がる土色の崖。一步踏み外せば死は易い。

怖い。死にたくない。

本能的な情動に足が竦む。

眼下に生える木々は低く見え、咲いた花は色と臍げな形しか認識できない。

ヴィーレは死ぬという状態を真面目に考えたことが無い。

死ぬとは一体何か。根源的な問いに応えられるほどヴィーレは危険な思いをしたことがない。疎まれていたとは言え貴族の一族として丁重に育てられたから分からないのだ。

そもそも自分が本当に死にたいのか。

それすらも分からない。

だが死ぬば楽になれるだろう。

生きるのは辛い。苦楽の周期が常に人生を狂わせる。楽が多ければ多いほど苦を忌避し、苦が多ければ多いほど楽に執着する。天秤の重りが偏れば偏るほど人生は歪になり、死にたくなる。

生は俗世的で、死は儚い。

少なくともヴィーレはそう思った。

天蓋と崖下を交互に視線を巡らす。

意味もなくそうしていると、声を掛けられた。

「あの……そこ退いてくれませんか？」

「……え？」

ヴィーレの肩が跳ねる。

この崖際は僻地で周囲には何も無い。街道も通っていないため用事が無い人間は近づかない場所だ。

振り返ってみると少女が立っていた。見た目は10代前半くらいで、絹みtainな金色の髪がゆらゆらと風に遊ばれている。身長はヴィーレと同程度、ぷくりと膨らんだ頬から幼さを感じる。

そこ……というのは今立っている崖際のことだろうか？

そう思つて反射的に後ろに下がる。

「ありがとうございます……」

少女は懇慫に一礼をすると、先程ヴィーレがしていたみたいに崖つぶちに立った。何をしているんだろうかとヴィーレは見守る。

少女は大きく息を吸って吐くと、両腕を天高く上げた。

そしてその状態で数秒立ち尽くすと。

倒れるかのように命綱も無しに少女は崖下へダイブした。

「…………え」

漏れるように息が出た。

止める間もなく落ちて行つた少女の立っていた場所に慌てて駆け寄り、一瞬息を呑んでから下を見た。

少女がこの崖に来た理由。

ヴィーレはそれを考えなかつた訳じやなかつた。この辺りには魔物も出沒せず、薬草や木の実もこれと言って取れない。小高い場所だから景観だけは良いが、それだけだ。それだけしかない。

少女もまた自殺をしに来たのだ。ヴィーレと同じように命を絶とうとした。絶つたのだ。

少女の死体はヴィーレからしても凄惨なものだった。

何回もバウンドしたのだろう。四肢は曲がるべきではない方向に折れ、良く見ないが頭の何処かが陥没して血が弾け飛んでいた。

遠くからでも少女が死んだのは明らかだった。

「……………うっ！」

胃から何かがこみ上げてくる。ヴィーレはえずくように何度も顔を上下させて、口元に手を当てて蹲る。

何かを勘違いしていた。

死だ。この呆気ないものが死の正体だ。死は何も生まれず、何も与えない。何にもない。

残酷さすら感じなかった。ただただ虚無の成れの果てだった。

幸いにも胃の中をぶちまける事は無かった。

ヴィーレの怯懦は仕方がないものだ。冒険者になったとはいえ未だ依頼の経験は無い。命のやり取りなんてしたこともない。人の死を見たこともない。死に対して過度な感情を押し付けていたのだろう。

いつしか自殺をしようだなんて考えはヴィーレから消えていた。

## 2話 死に近い場所

金が無いと生きていけない。物も買えない飯も食えない宿にも泊まれない。三時のおやつだつて露店でジツと見ることにしか出来ない。金と文明的な生活は切つて切り離せないのだ。万国共通の概念である。

生活するには金が必要。

財布を確認してヴィーレもそれを実感することになった。

「レミア青銅貨8枚……これじゃ明後日には宿から出てかないといけなくなるんだよね。しかも3食抜きでもんなあ」

侘しい。侘し過ぎる。

ちよつと泣きそうにながらヴィーレは溜息を吐いた。

ルングルーグン家にいた頃なら毎月レミア銀貨10枚は貰っていた。それが今やレミア青銅貨6枚。

レミア青銅貨15枚Ⅱレミア銅貨1枚。

レミア銅貨25枚Ⅱレミア銀貨1枚。

そんな交換比率を考えるとヴィーレの生活水準は随分と低くなつたことが分かる。



貴族生活の名残から昨日はちよつと金銭感覚がバグったが、それでもヴィーレの金銭感覚は少しマシになりつつある。

まだ自殺未遂を起こして一時間くらいとはいえ、生きたいというポジティブな思考は無くとも死にたくない以上金は要り用だった。

よつてヴィーレはギルドの依頼を初めて受注することにした。

ギルドの依頼ボードは大きく二つに分かれている。

常設依頼と特定依頼。

常設依頼は常に設置されているギルドの依頼である。薬草の採取や食用野生生物の捕獲などなど。

特定依頼はギルド以外の個人や組織が冒険者に出す依頼だ。こちらは一回きりの場合が多く、受注しようと思う場合は一度依頼者と面会した後に本当に受注するのかを判断することとなる。その難易度も誰でも出来る雑用からドラゴン殺しまで種々様々だ。

悩んだ上でヴィーレは薬草採取の常設依頼を引き受けることにした。

薬草採取は特筆することがなく滔々と終えることが出来た。

レリーズ草の規定本数25本、丁寧に数えて袋の中に詰めると額に浮かんだ汗を袖で拭う。

ヴィーレは知らないが本来これは子供でも出来る簡単な依頼である。草花の見分けさえ出来れば誰でも可能な最低ランクの依頼。その証拠にヴィーレはこの森で何人かの子供とすれ違っている。ただヴィーレ自身は「こんな小さい身体で家のお仕事なんて凄いなあ」とのほほんと草を摘んでいたが。

薬草を採取し終え、ギルドに戻ると受付カウンターにギルドカードを提示した。

受付嬢はヴィーレのギルドカードを見て頷いた。

「常設の薬草採取ですね。規定本数通りですのでレミア青銅貨7枚になります」

「青銅貨7枚……失礼ながら少なくないですか？」

「そう言われましてもこちらも業務表に従っているだけです」

レミア青銅貨7枚。先日金貨2枚を食いつぶしたヴィーレが飲み食いすれば秒で溶ける金額だ。

……思った以上に稼げない。これが冒険者と言う職業！

もつと楽に生きてけるだろうと思っていヴィーレに戦慄が走った。

「あの、因みに私が出来そうな依頼で高いものって何かありますか？」

「依頼にもよります。Fランクの常設依頼ですとゴブリン退治ですが……戦闘に自信があつたりしますか？」

「戦闘……ですか？　一応剣は握れます」

そう言つてヴィーレは柄に手を置いた。

ルングルーグン家から貰つた路銭の大半を使つて買ったレイピアだ。本当はロングソードを買いたかつたのだが力が足りない。女に比べて男は非力なのだ。

それに仮にロングソードを持てたとしても哀しきかなヴィーレの戦力はあまり変わらない。ヴィーレは剣を使ったことなんて一度もないので魔物と接敵しても「えい！

えい！」と子供みたいにブンブン振ることしか出来ないのだ。それはレイピアでも同じである。

何となく察した受付嬢は愛想笑いを浮かべながら口を開く。

「ですとゴブリンは厳しいですね……。彼らの大半は子供くらいのサイズしかありませんが、集団だと戦術的に動いて襲ってきます。新人の方が一人で熟すには重い依頼です」

「そ、そんな事をするんですかゴブリンって。魔物なんですよね？」

「誤解があるようですね。群れを成す魔物は総じて規律だつて獲物を殺します。群れを

作る魔物って存在自体があまりいないんですけど」

「つてことはゴブリンは特別なんですか？」

「いえ、どこでもいますよ。だから常設で退治依頼が出てるんです。現在集団行動が確認されている魔物は9種ですね。言うまでもなくゴブリンが最も雑魚ですけど」

「雑魚ですか。それなら一体でいるところを狙えば私でも勝てるんじゃない？」

「そうですね……私の手を握ってくださいますか？」

「は、はい？」

「良いですから」

ヴィーレは言われた通りに受付嬢の手を握った。何故か受付嬢はウツトリと目を細めると、ヴィーレの手は絶妙な手加減でにぎにぎとされた。

なんだこれ、なんでしようこれ、と当然のようにヴィーレは戸惑う。

握手かと思っただけど目的が全然分らない。いま何をされてるんだろうか、と今度は腕をプニプニされながらヴィーレは考える。

1分くらい触り続けた後に、何故か名残惜しそうに受付嬢は手を引つ込める。

「筋肉が無さすぎてゴブリンの首すら落とせませんよ。これじゃ雑魚以下の雑魚ですね、冒険者様」

「え、何で罵倒されてるんですか私。なんか凄い触られ損じゃないですか」

ヴィーレは普通に凹んだ。

筋肉量が無いのは性別差によるものだろう。

男ってつくづく弱いなあとヴィーレはガクリと肩を落とす。

「まあそういうことなので自分を鍛えながら地道に稼ぐのが一番ですよルングルーグンさん。オススメは特定依頼で良く出る街の外壁工事ですね。力作業で鍛えられますし、報酬も銅貨一枚と薬草採取より高い報酬です」

「なるほど……。色々と教えてくださりありがとうございます、受付嬢さん」

「マリーと呼んでください。女性なら出来ますよ、頑張ってください」

女性じゃないんだよなあ……。

複雑な気分になりながらヴィーレは青銅貨を握り締めた。

不味が安い飯を食べて、泥のように眠り、翌日。

空がまだ薄々照らされた澄明な朝の空気の下、ヴィーレは再び崖に来ていた。

今度は自殺をしに来たわけではなかった。ヴァーレも明確な理由は分からない。ただ気分転換に足が向くまま歩いたらここに着いたというだけで、どうしてだろうなあとヴァーレは思う。

何の気なしに昨日立っていた崖際で崖下を見下ろす。

今度はあの時ほど絶望感は湧いてこなかった。それどころか草木の色が昨日より鮮やかに見える。きつと気分のせいだろう。鬱々とした精神状態は世界を悪く捉えるものなのかもしれない。

一度寝たことで気分がリセットされたんだと前向きに捉えたヴァーレはふと気付く。

「無い……ね」

何が？

死体だ。少女の死体。

昨日の飛び降りた少女である。

ヴァーレは確かに目撃した。

飛び降りた瞬間も、痛々しく捻じれた四肢も、悲惨すぎて思い出したくないほど壊れた頭部も。

それなのに無い。血痕は残っているのに肝心の身体が無い。

眼下の景色を注視しながらヴァーレは考える。

野犬や魔物に食われるにしても、1日にして跡形も無くなるほど食い荒らされるのは無いはずだ。それ以前にここは野生動物が殆どいない場所である。とすると誰かが片付けた……？ 確かに死体なんて見ている気分の良いものじゃないが、それでもたった1日でギルドから依頼が出て片付けられる、なんてことは無いだろう。

「あの……退いてくれませんか？」

「あ……え？」

デジャヴだった。

その声には聞き覚えがあったのだ。

背後を見るとヴィーレの予想通り、或いは予想外の少女が立っていた。

「あの、貴方は……」

「……どこかで会いましたか？」

「昨日、此処で」

「ごめんなさい……覚えてないです」

見覚えのある慇懃な一礼。それに伴って金色の髪が揺れた。

間違いない。この少女はあの時飛び降りた少女だ。ヴィーレに確かな死という状態を見せつけ、死に対する幻想を砕き壊した少女だ。

何で……いや見間違いだっただらうか。それともアンデッド……？

その疑問はヴィーレの理解の範疇を大幅に超越したようで、深く考えるより前に口を開けた。

「ここから飛び降りるんですか？」

「はい。いま貴方が立っている場所はこの崖で一番高い場所。死に近い場所です」  
「死に近い場所……」

地面を見てみる。

ヴィーレにはとても違いが分からない。崖は崖で、どの地点から落ちてもヴィーレは死んでしまうだろう。ヴィーレの立つ場所とその三步横の場所の高さはあつて精々小石1個分か2個分の差異しかない。ヴィーレのような至つて普通のか弱い人間にとつてそんなのは誤差の範疇である。

「少して良いんです、退いてくれませんか？」

「えつと……死にますよ？」

「だと良いんですが」

奇妙な迫力に負けてヴィーレはその場所を譲つてしまう。少女は頭を下げて、それから昨日のリプレイだった。スー、ハー、と深呼吸を幾回か繰り返すと少女は手を上げて、自然体のまま落ちた。そうなると分かっていたヴィーレは少女が自然落下していく様を崖上から見つめる。



少女の小さな身体が崖の岩肌に当たり、肉を打つ鈍い音が響く。それから少女の身体は地面に打ち付けられ、角度が付いていたためにゴロゴロと樽でも転がしたかのような軌道で地面を進み、やがて止まった。損傷度合いは違っても過去見た死体だからか昨日よりは幾分冷静にヴィーレはその様子を見守っていた。

死んだ……はずだ。

だけど死んでなかった。それとも生き返ったのか。ヴィーレには判断が付かない。

今のヴィーレにあったのは未知への恐怖と困惑。それから好奇心。

気付けばヴィーレは少女を追って崖下まで下りていた。迂回路を使つて5分も歩けば少女の死体の元へと辿り着く。

見るだけで精神がやすりで削られてしまいそうな少女の無念な死体。

しかし不思議と導かれるようにヴィーレは少女の胸元に手を置いた。

「本当に生きてる。こんな致命傷があつて死んでない……？」

ドクンと確かに刻まれている鼓動の音。

足はひしやげ、腕は外側に折れ曲がり、肌は傷が無い場所を探す方が難しい。痣やら出血やらで酷い容態なのに、生命力が弱々しくなる気配が無い。

取り敢えず応急処置をしとこう、とヴィーレは少女を看護し始めた。

### 3話 不死の少女を殺す方法とは

驚いたことに少女の身体は次第に修復されていった。

ヴィーレは最低限の治療はしたものの、それでも出血を止める程度のことしかできていない。それなのにどんどん勝手に治っていくのだ。少女の身体だけ早送りで時間が過ぎていくみたいに、常に回復魔法を掛けられているみたいに、傷は塞がって痛んだ肉が剥がれて新しい肉が現れる。時計の針みたいに曲がった骨は分針が進むみたいに本来の可動範囲内へと戻って行く。

一時間もすれば少女の傷はほぼ回復し、残ったのは擦り傷や軽い切り傷が幾つかあるのみ。それが治るのも時間の問題に思える。

当然こんな回復力は人間のそれじゃない。

さながら噂に聞くヴァンパイアとかアンデッドみたいな体質に見える。見えるが、ヴィーレはその少女の可愛らしい姿に絆されそうになる自分にちよつと微妙な気分だった。

「……………」

ヴィーレは少女の頭を膝に乗せていると、少女の口から掠れた声が漏れる。

目を落とすと、既に少女の目はぱちくりと開いていた。翡翠の双眸がこちらを見ていた。少女はヴィーレから視線をスライドさせて、周囲を確認するように目を更に大きく開いた。

間を置いて口を開いた。

「私……飛び降り自殺、出来なかったんですね」

「普通、死ぬと思うんですけどね」

ヴィーレはそう言いながら少女の身体に目を走らせる。服が異常にボロボロになった以外、最早大した怪我も無い。

恐らく昨日もこんな感じで生き返ったのだ。

いや、死んだかどうかすら定かではないが。

どうあれこの少女は不死身らしいとヴィーレは思考を打ち切つて乱暴に結論付ける。理解を放棄したとも言うかもしれない。

「傷は無さそうですけど大丈夫ですか？」

「……お陰様で治つてるみたいです」

「私は何もしてないですけどね」

確かめるように両腕を曲げる少女にヴィーレは曖昧な笑みを浮かべる。常備してる治療用の布は使ったが、9割9分は少女自身の自然治癒力によるものだ。

本当に何もしてないんですけどねえ、とヴィーレは困りつつ頬を掻いた。

「あの、聞いても良いでしょうか？」

「何故自殺を図ったかという質問なら答えたくないです」

「え、あ、そうじゃないですけど……」

「或いは何故死なないのに投身自殺を図ったのかという疑問も答えたくないです」

ダメらしい。

それもそうかとヴィーレは諦める。

自殺の理由なんて簡単に喋れるようなものではない。昨日自殺しかけたヴィーラだつてその理由を喋れと言われても喋りたくない。

「それでは私はこれで」

「ちよ、ちよつと待つて下さい！」

「なにか用でも？」

少女の訝しむ眼差しに心がヒュンと縮む。

声を掛けといてアレなことにヴィーラは特に何かを考えて呼び止めた訳じゃなかった。昨日と合わせて二回会っただけの少女だ。関係性はたったそれだけ。少女と話す理由も関わる必然性も皆無に等しい。

だがヴィーラの身体は勝手に動いた。

何処か夢げで、今にも霧になって消えてしまいそうなほど虚ろ気な雰囲気を纏った少女からヴィーラは目を離せなかった。女だから自分より強いハズなのに。

何というか、哀しいな、なんてヴィーラは思ってしまったのだ。

ヴィーラは自傷を繰り返す少女を見捨てられなかっただけで、話そうと思う理由なんてその一つで十分だった。

「自己紹介、しませんか？」

「何でそんなことを……」

「せ、折角ですからね！ 私はヴィーレ・ルングルーゲンです、貴方は？」

「自己紹介する必要を感じません」

「私を感じてるんですよ。それでも嫌と言うなら私は自殺少女さんと呼ばせてもらいます」

ヴィーレの強情さを感じ取ったのか、少女は浅く長い溜息を吐いた。

「……ニユエル。そう名乗ってます」

名乗ってる……か。

多分本名じゃないのだろう。しかし深入りするつもりが無いヴィーレは自然と目を見開いて、笑みを浮かべると頷いた。

「じゃあニユエルさんですね。ちよつとご飯とかどうですか？ 私、まだ朝ごはん食べ

「てないんですよ」

「遠慮します。お腹空いてないので」

「そうなんですか？ もしかして冒険者だったりします？」

「……すみません。失礼します」

「え、あつ」

ニユエルはスカートについた土を払うと立ち上がる。そのまま立ち去ろうとするニユエルに、ヴィーレは反射的に肩を掴む。

「何ですか……」

「え、えつと」

何かを言おうとして、声が上がったまま止まった。

こういう時はなにを言えば良いか分からない。一旦状況を整理しよう。自殺しようとして失敗した美少女に語るべき言葉……ヤバい、さっぱり分かんない。どんな話題を持ち出せば良いんだろう。今日のご飯は何ですか？ それともご職業は何でしょうか？ 全部駄目な気がする。

ニユエルは不審者を見る目で不快そうに眉を顰めると、パンと手を払いのけた。

「何も無いのならこれで」

「……………はい」

目尻が上がったニュエルにヴィーレは恐れ戦いた。怖い。マジ怖い。女って怖いよ姉さん！

割と簡単に怖気づいたヴィーレはそれを呆然と見送った。

---

「で、何でいるんですか？」

次の日。

ニュエル曰く『死に一番近い場所』と言われる崖に再びやって来ていた。ニュエルは崖の上の最早定位置となった場所に佇んでいて、ヴィーレがその背後から相対している構図である。

「あはは……へへ……」

昨日に引き続き何を言うかは決めてなかったヴィーレは曖昧に笑った。それを見たニュエルは無表情のまま前髪を弄る。

「笑っていないで何とか言って下さい気持ち悪い」

「辛辣すぎませんか?」

ちよつと怖くなったヴィーレはごくりと唾を飲み込んだ。

自分でも何で来たんだろうかと回顧する。するとヴィーレの中で浮かぶ記憶がある。姉との会話だ。

『ヴィーレ、女の子には優しくしなさい』

『僕より身体が強いのに?』

『グツ……それはアレよ! 女の子はああ見えて強くないの。砂糖菓子みたいに繊細で脆いの!』

『はあ……全く分かりませんが分かりました姉様』

以上、ヴィーレが良く姉から言い聞かせてきたことである。今でも女を守る対象と見せようとした姉の思考は分からない。ただ普段は頭脳明晰なのに自分が絡むと途端に頭が悪くなる姉のことだからどうせ下らない理由なんだろうなあ、と頭から昔の思い出を振り払う。

「何で来たんです?」

「……何となく?」

「馬鹿じゃないですか、いえ馬鹿ですね。ルングルーグンさんは」

容赦の無い言葉に項垂れかけて、ピクリと跳ねたヴィーレの髪が触手みたいに動く。



「名前、覚えてくれたんですね」

「まあ。今まで会った中で一番ヘンテコな家名だったので」

「あの……一応男爵家の家名なんですが」

「貴族のことは知りませんが所詮男爵家ですよ。100年後にあるんですかその家。そもそもそれだけ時間があると国の存亡すら危ういですね」

「私以外に言わないでくださいねそれ。普通に不敬罪で捕まりますよ」

「へっ……。今更国とか貴族とか知らないですよ。ここから落ちたら簡単に死ぬ分際共で私に盾突こうだなんて100年早いです」

なんか良い感じでやさぐれてる……。

思った以上にやぶれかぶれな物言いをするニユエルにヴィーレはちよつと引いた。

「でもその口調、本当に死なないんですね」

「……ええ、まあ。昨日も見てた通り私は死なないです……本当に死ねません」

「やっぱりに死にたいんですね、ニユエルさん」

その言葉に初めてニユエルは動揺を露わにした。

今までしてきた行為を他人に言語化されたことがなかったのかもしれない。二度にも及ぶ能動的な投身自殺。誰でも見れば分かることなのに、ニユエルは自覚をしていなかった。

「はい、ええ。死ぬることなら早く死にたいものです。まあ死ぬないから無駄な行為なんですけど」

ニユエルの顔を見てヴィーレ言葉を失った。

まだ自分と変わらない年齢なのに、死ななきやならない、死にたいと本気で考えている顔だ。しかもそれは合理性を考えて、そうすべきと思っっている。

「私はニユエルさんを死なせたくないです」

そんな言葉が口を突いて出た。

ニユエルの事情は全く知らないが、それでも良いと身勝手にヴィーレはその紫眼を見つめる。

「……何ですか貴方。他人の事情にずかずか入ってきて」

「自殺志願者に死なないで下さいって言うのは変な事じゃないですよね？」

「あの、直球で言いますけど迷惑なんです。関わらないでください。さようなら」  
「あっ」

ニユエルの身体が空を切る音。

何というか、二度あることは三度あるというか。

再びニユエルは崖から身を投じた。

崖下に行くのは二度目だったからかヴィーレは3分で下りた。

昨日と同様に看護をしつつ右手がニュエルの髪のに伸びて、優しく撫でた。その感触が刺激になったのか、ニュエルは静かに目を開けた。

「……頼んでないですからねこんなの」

「頼まれてないですよ。私がやりたかったんです」

「うへ……やりづらいです。と言うか頭撫でないで下さい！」

「あ、ごめんなさい……」

「べ、別に良いんですけど……ホントやりづらいですぬ貴方」

シユンとしたヴィーレにちよつと罪悪感を覚えたニュエルは目を逸らす。純粋な善意を無碍にするのも心が痛んだのだ。

「今まで何回こんなことをしたんですか？」

「数えられないです。死なないんだから数えても無駄ですし……何やつても死なないんです。包丁で肌を切るのも崖から身を投げるのも魔物に食べられるのも、全部カウントしたらキリが無いですから」

「はあ……。そこまでして死にたいですか」

「それ、今更聞くようなことですか？」

「確認です」

「……何ですか」

胡乱な目つきをするヴィーレにニュエルは目を細めた。

「私には本当に死のうとしてるようには見えないです」

「何をやっても死ねないんですから、それはそうだと思います」

「そういう意味じゃなくて、何をやっても死ねないにしてももつと方法があると思うんです」

「方法、ですか」

繰り返すニュエルにヴィーレは頷いた。

「例えば薬で眠り続けるとかすれば実質死んだようなものですよね。ただ無意味な自殺を続けるニュエルさんのそれって中途半端な気がします。自殺というより自傷です」

要は本気で死のうという意思が見えないのだ。

肉体を幾ら痛めつけても死なないのを分かっている、それでも身を崖から投じる。傷が治ってもまた身を投げて、それを三度。いやきつと、ヴィーレが目にする日まで幾度と繰り返されてきた。惰性的に、自罰的に行われるそれは最早自殺じゃない。ただの自虐行為だ。

「中途半端……ですか？」

ヴィーレの主張にニュエルは唇を戦慄させる。

感情を抑えようとして、そう意識的に考えるたびに呼吸は荒く、肩の震えは大きくなっていく。

「貴方には分からないんですよ！ この不死の恐怖、未来への恐怖が！ 遠い未来どれだけ悍ましい結末を迎えるのかを理解している私の人生が、既にどれだけ陰鬱としてて光が無いのか！ 分からないから言えるんです！」

「分かりますよ。少なくとも私もここで死のうとしましたから、理由は違っても似た絶望があつたので分かります」

「……え？」

ニユエルはその言葉に息を？む。

「でも私は死ねませんでした。死ぬのが怖いからです」

「今更、そんな上っ面な言葉だけで」

「聞いてください。ニユエルさんと違って私はここから落ちたら死にます。生きていたとしても身体の関節がおかしな方向に曲がって、出血も止められずにやっぱり死にます。でもニユエルさんは死にません。勿論落ちたら痛いのもかもしれませんけど、それでも命が潰えることはありません。だったらニユエルさん、貴方はまだ真剣に死について考えたことがないはずだ」

「馬鹿にしてるの？」

「してません。想像ですが、例えばニュエルさんはこの崖を見ても恐らく死の恐怖を感じてないはずですよ。ですから、死ぬにしても本当の死の恐怖を味わってからどうするかを決めれば良いと思います。私がしたように恐怖に慄いて死を忌避するか、或いはそれでも死を望むのか。そこで判断しても遅くはないでしょう。何せ不死ですし」

そこまでヴィーレが述べると、ニュエルは神妙な面持ちで目尻を下げた。

ニュエルが死の恐怖を感じたことが無いというのは正直、ヴィーレの勝手な想像だ。だがほぼ核心を付いているという予感があった。これが最初というのならまだしも、既に何度も繰り返されているならば恐怖など感じようも無いだろう。5回を超えれば自殺もただの習慣になる。

ニュエルは何かを考えるように俯いていたが、少しして顔を上げた。

「ねえ、じゃあ一つお願いしても良いですか？」

「はい？」

「そこまで言うなら、私が死ぬ方法を一緒に探してください。私が本当の死の恐怖を感じないと断言したその責任、取ってくださいね？」

死なない人間が死ぬ方法……か。

当然ヴィーレにそんな心遣いは無い。そもそも不死と言う概念がまずありえないからだ。幾ら貴族社会に属しているときに様々な物を見てきたり色々な話を聞かされて

育った経験を持つヴィーレにしても、死なない人間が世にいと考えたことは一度もなかった。

それでも、情報が足りなかるうが、自分に自信が無かるうが、ヴィーレがその少女を見捨てる理由にはなりはしない。

「……分かりました。ニュエルさん、これからよろしくお願いします」

ニュエルはヴィーレの手を取ると、微かに口角を吊り上げた。